

富士ダイス

金属3Dプリンターなど紹介

国際工作機械見本市に出展

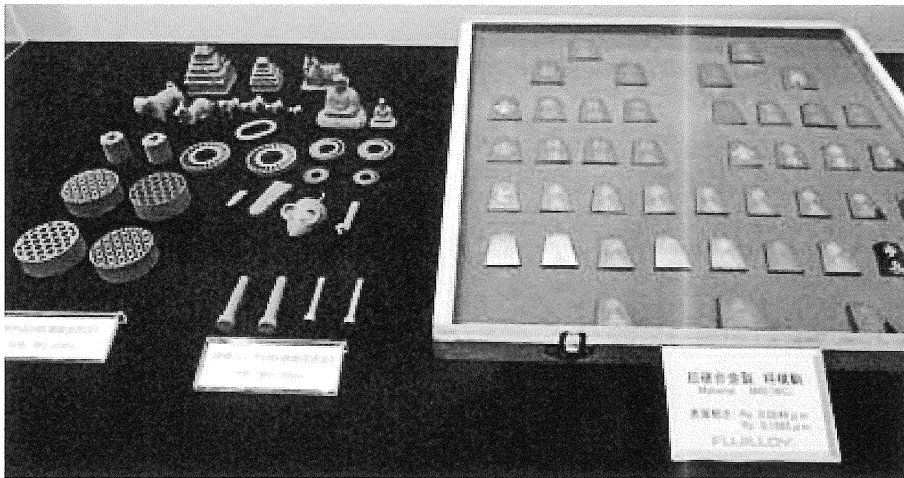
超硬合金製工具・金型で国内シェアトップの富士ダイス(6167)は、金属粉の粉碎・混合から焼結、加工、製品検査までの一貫生産体制が強い。高い粉末冶金技術を用い、広範多岐にわたる産業分野で顧客ニーズに対応する。

11月1～6日に東京ビッグサイトで開催された「JIMTOF(日本国際工作機械見本市)2018」で、「金属3Dプリンター」をはじめとする新開発技術・製品を出展した。一般的

に、金属3Dプリンターは金属材料にレーザーを照射し溶融・造形する手法が用いられる。同社は積層造形技術を用い、超硬合金特有の硬さ・性能は維持したまま、精細で複雑な形状の工具・金型製作を可能とした。金属部品の軽量化・小型化が進む中、さまざまな産業分野で活躍が期待される。

また、ヒートシンク(放熱板)や光通信用部品への応用が想定される高熱伝導率素材「フジロイ FHT」も注目どころ。こ

ちらは性能面では高い評価を得ているが、コスト面での課題が残る。商用化に成功すれば、レーザー発信機、LED(発光ダイオード)、および無線基地局(5G)領域などでの活用が進みそうだ。



金属3Dプリンター造形品